

## あ と が き

昨年のちょうど今頃、入道雲が青い空に力強く育っている盛夏、山の仲間がどんどん上野、新宿から旅立って行く中で、青白い顔をして東京中を西へ東へと準備に走り回っていたことを想い出す。真黒に陽焼けした顔を見ると嫉妬めいたくやしさを感じたものだった。そして今、同じようにむし暑い中、部屋中が原稿用紙や版下が無造作に開けられた中で旧盆の東京の青空を見上げながら編集作業を進める。

去年と違っていることは、あの1週間、10日、1ヶ月と出発が遅れる苛立ちとは反対に、原稿を読みながら、谷の源頭へ入ったときの胸の高鳴、登頂のときの思い出など鮮明に頭に想い浮べ、そして本を作り上げてゆく充実感がある。

帰国してから1年間、我々の周りにも色々と変化が起きた、増子は騒がしい東京から郷里へ帰ったし、私も職場が変わった。皆それぞれ一段落したところで原稿も思うようには集まらない。「資料」「報告」などは思いのほか時間がかかってしまった。頭初「帰国後2ヶ月で報告書を作り上げる。」と豪言していた隊長もさすが2ヶ月は難しいと思ったようだが、早急に報告することは我々の義務であると思う。ともかく報告書は後で資料として役立つものでなければならない。ということが全員の考えとしてあった。もちろん隊へ協力して下さった方々への報告ということもあって二面性を待ったもので、かつ一つにまとまった良いものを作ろうと努力したつもりである。原稿を書いた者たちもそれなりの苦勞をして見やすく、判りやすいものを書こうとしてくれたようである。

この報告書がわずかであってもこの地方へ行こうとする人達に益するところがあれば編者としてこれに過ぎる喜びはない。

(井口邦利)